

事例 4 上勝町ゴミゼロ運動（徳島県上勝町）

概要

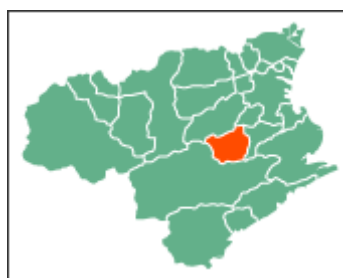
上勝町は、2003年9月に日本の自治体として初めて「ゼロ・ウェイスト宣言」を行った。「ゼロ・ウェイスト宣言」は、2020年までに町内から出るごみをゼロにする（焼却や埋め立てをするごみを無くす）ことを目指している。町の「ゴミステーション」では、すでに34種類の分別を行い、リサイクル率80%を達成している。

テーマ	ゼロ・ウェイスト宣言による、町内のごみの3R推進
主体・キーパーソン	上勝町、NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー
手法・技術	ごみの詳細な分別 生ごみの再資源化

背景

上勝町は徳島県の中部に位置する人口約1,800人の町である。総面積109km²のうち85.4%が山林で平地はほとんどなく、標高100mから700mの間に大小55の集落が点在している。産業は、農業、建設業、サービス業等が主な就業先となっている。近年、ゴミゼロ運動のほか、「彩」（いろどり）の栽培（葉っぱを活用した地域ビジネス）でも全国的に知名度が上がっている。

2000年代前半、全国でダイオキシン問題に対処するため、複数の自治体を集めて一定のごみ量を確保する「ゴミ処理広域化計画」が進められていた。これに対し上勝町は、「何でも燃やして埋め立てるごみ処理は環境汚染や住民不安、自治体の財政圧迫といった問題を引き起こし、抜本的な解決にならない」と国の政策に異を唱え、リサイクルによって脱焼却・埋め立てを図るごみ政策への転換を宣言した。



上勝町位置図
(出典：徳島県 HP)

取り組みの内容

1. ごみ処理システム

上勝町のごみ分別数は34種類となっており、生ごみは電動式生ごみ処理機、コンポストによって各家庭で処理されている。山村であり、土地に困らない上勝町では、土の利用方法がないといった都市部で見られるような問題はなく、うまく利用されている。

生ごみ以外のごみについては、町のほぼ中央にある「日比ヶ谷ゴミステーション」に町民が各自で持ち込んでいる。ただし、高齢者で車を持たない世帯等、町が「収集支援対象者」として認定した約100世帯については、2ヶ月に1回の戸別収集が行われている。

ステーションは、年末年始を除き、毎日朝7時半から14時まで開所しており、町民は都合の良いときにいつでも持ち込むことができる。ステーション内では、シルバー人材センターを通じて50歳～70歳代の作業員が、空き缶やペットボトルの圧縮作業を行うかたわら、分別指導等も行っており、分別が分からない場合は聞くことができるようになっている。また、ステーションには、分別品目ごとのコンテナが用意されている。分別する意味を町民に実感してもらうため、それぞれのコンテナの前に分別品目と、それがどのようなリサイクル・処理をされるかが示されている。

上勝町は、町外も視野に入れたゼロ・ウェイストの実現に向けて、2005年4月1日にNPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー（ZWA）を設立した。ZWAは、同年から上勝町の委託を受け、日比ヶ谷ゴミステーションを拠点とした、さらなる3Rの推進活動を展開している。



ごみ 34 分別とその行方（出典：松岡夏子）

2. ごみを地域の資源に

ZWAでは、リサイクル推進と並行して、町のごみ処理経費の削減のため、ごみを地域の資源にしようという新たな活動を行っている。34分別中、リサイクルされる品目で、かつ、有償引き取りされるのは、牛乳等の紙パック、スチール缶、アルミ缶、（粗大ごみのうち）金属類、紙類では電話帳、布類では綿生地と毛布だけである。当然、分別・リサイクルに

よってごみ処理経費全体の節減はできているが、その他のごみについて町が処理費用を支出することには変わりはない。このような背景から、町外のリサイクル業者に処理を委託するだけでなく、より町民に還元される形で、町にとっての資源としてごみを活かす方法が模索されている。

(1) 不用布をリメイク：くるくる工房

ごみの資源化の一例が不用布のリメイクである。現在、地元の60～70代の女性たちが不用になった衣類・布類をリメイクし、作品を販売する「くるくる工房」として、上勝町介護予防活動センターひだまり（ZWAが指定管理者を務める）の一角を活用している。リサイクルの難しい衣類等を、知恵や器用な手先によって生まれ変わらせることで、ごみの減量と同時に、年配女性にとっての生きがいにもなっている。

お祭りから出るごみを何とかしたいという思いが活動のきっかけになっている。上勝町では、全国から不用になった鯉のぼりを集め、毎年5月の子どもの日に合わせて、川の上空に何百匹もの鯉のぼりを吊るす「八百万鯉まつり」というお祭りが開催されている。このお祭りで使えなくなった大量の鯉のぼりが粗大ごみとなる。鯉のぼりのユニークな柄を活かせないかと、「ひだまり」で座布団づくり等の活動を行っていた女性がナップサックを作ったところ、通信社の記事に取り上げられ、くるくる工房を訪れた視察者にも好評を得た。多くのメディアに取り上げられたことも手伝って、その後、鯉のぼりの他にも、ジーンズや着物、衣類、端切れ等を使って、エプロンやくまのぬいぐるみ、シュシュといった様々な製品へとリメイクされ、販売できるまでになった。リメイク品の売り上げの一部は製作者にも還元されるため、くるくる工房は、年配の女性が技能を発揮し、評価と対価を得られる、生きがいの場にもなっている。

(2) リユース推進：くるくるショップ

34 分別でリサイクルの徹底は図れたが、リユースについては十分な取り組みが行えていなかった。焼却・埋め立て処理されるごみの中には、家具類や洋服、食器、本等まだ使用可能な物も多くある。そこで、2005年冬頃から、ゴミステーション内の一部のスペースを「再利用可能な物」置き場とし、まだ使える物を必要な人に利用してもらう試みを始めた。当時「ごみ」をテーマに学習を行っていた上勝小学校5年生の協力を得て、「くるくるショップ」という名称をつけて、不用品を並べるところから開始された。しかし、当初は、食器や洋服の入ったダンボールが雑然と並んでいるだけで、「ごみ」というイメージが拭いきれず、利用もあまり進まなかった。

2006年10月に環境省の「エコ・コミュニティ」事業の採択を受け、また、大学生のアルバイトや町民の協力を得て、「かわいい雑貨屋」を目指し、内装を手作りで改装した。ダンボールに埋まっていた不用品も取り出して並べ、「何があるのか」が見えやすいようにした。その後、利用は順調に進み、1年間に2.2トンの不用品が持ち込まれ、そのうち77.5%にあたる1.7tが持ち帰られて活用されている。利用件数で見ると1日に約3～4人が利用している。ある1人にとって不用だった物がゴミステーションにプールのされ、他の人々のア

クセスが可能になったことで、新たな用途で使われるようになった。また、このリユースの推進は、新しい物を購入せずに町の中にある物を活かすことにもなり、ごみの発生抑制にもつながっている。

成果と課題

上勝町のごみのリサイクル率は 8 割を超えており（2003 年）、全国平均の 2 割を大きく上回っている。1 人当たりのごみの量についても、1 日あたり 400g と、全国平均の 1,106g の半分以下である。1 人あたりのごみ処理費用が年間 1 万円前後で、全国平均の 3 分の 2 程度になっている。

ゼロ・ウェイスト宣言後、約 1 年間で 1,023 人の視察者が上勝町を訪れている。また、ごみを無くそうとする町の生産物は安全だろうとのイメージが生まれ、農産物の信頼性や付加価値が高まったと行政は見ている。

度々診療所へ通っていた女性が、毎日のようにくるくる工房での活動を楽しんでおり、精神的な面でも、効果が出ていると考えられる。

しかし、100%のリサイクルに向けては、まだ課題が残っている。例えば、RPF（プラスチックと紙を原料とする固形燃料）の利用、リサイクルの過程で出てくる残渣のこと等が挙げられる。

[参考文献・資料]

- ・井部正之（2009）「5 年を経たゴミゼロ取り組みー上勝町に見るリサイクルの課題」『日経エコロジー』2009 年 5 月号
- ・松岡夏子（2009）「上勝町のゼロ・ウェイスト政策--その実践と展開」『マッセ Osaka 研究紀要』12 号
- ・徳島県 HP <http://www.pref.tokushima.jp/>